慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日吉臺發見遺物
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.2 (1932. 7) ,p.170(316)- 171(317)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320700-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て此の日の調査を終る。

尙ほ、第二號住居址の北部に隣る第四號住居址との間に於ても溝狀を呈せる赤土面を發見、其出現狀態を見るに、稍東北を指して第二號よりすれば當に第四號の中心に向つて約三十糎乃至六十四糎の幅員を有する長さ西邊に於て約六米三十糎、東邊に於て約四米十糎通路を思はしむるものを發見し、第二號、及び第四號の周緣に接する部分は夫々底面上約十三糎の高さを爲し、第四號住居址の南邊に近く、此通路(?)の西方に接して一個、及び通路(?)に平行して、更に西方に二個及び三個の二列を爲す柱穴(?)を發見、直徑は各〻約十八糎內外、深さ約二十糎なるを發見し居れり。

五月三十日(月)

昨日木炭の散在によつて第二號住居址の南方に當り更に住居址の存在を推想せるを以て之が調査を爲すに、果して直徑約四米五十糎の圓形を呈せる住居址を發見せり。爐跡の如きも其南邊に近く二個を發見、柱穴も東邊、赤土段上に一個、(徑約十八糎、深さ約十四糎)少しく南方に廻りて一個(徑約二十糎、深さ約十五糎)、西方に於て東方に於けると對照的に一個(徑約十五糎、深さ約廿四糎)及び北方に於ては第二號住居址との間を連絡するが如き通路(?)に接して一個(徑約十八糎、深さ約三十糎)の都合四個を發見せるも、農耕上、芋の貯藏によつて深鑿された箇所あり、その深さは底面下に及び、以て調査上に不正確を招き、單に住居址(?)の參考たる程度に止めざるを得ざるものなり。尙ほ、發掘中、赤土段面下約二十糎乃至約二十四糎の黑土中より土器片少數を出だせり。(森貞成記)

× 點板碑發見地

日吉臺發見遺物

本塾移轉敷地內に古墳、及び先史時代住居址ありて別稿の如く本會にて發掘調査中なるがその外人夫の手にて左の品々偶然發見されたり。

青石卒塔婆(板碑)

昭和七年三月末、日吉村大字箕輪、俗稱桃畑(箕輪池南方)の斜面の櫻樹を移植せんとして發掘中その根本より、青石卒塔婆(板碑)八枚積み重なりし儘發見さる。其の中殆ど完形を具へたるもの五枚、年號を遺すものまた五枚あり。その他形をとゞめざる破片少許あり(口繪參照)。

年號を存するもの五枚につき順を遂ふて見れば、次の如し。

(一)、觀應元年銘あるもの

縱、五十九糎四粍、橫、二十糎三粍、厚さ(上部)二糎一粍(下部二糎四粍、緣取りしたる內側は縱、卅一糎二粍、橫十六糎七粍

にして上部に彌陀の梵字並にその下に花瓶一個を刻し、年號は向つて右側に在り。

(二)、延文二年銘あるもの(但、左下部を缺く)

縱廿四糎八粍、横十五糎八粍、厚さ二糎三粍にして右方に年號あり、梵字其他殆ど見る能はず。

(三)、應永十七年銘あるもの

縱七十糎六粍、横二十糎三粍、厚さ二糎にして稍〻右方に偏して緣取りし、其縱三十三糎四粍あり、中央上部に彌陀の梵字、其下に年號あり、之を挾んで一對の花瓶刻されたり。

(四)、應永廿一年銘あるもの

縱四十八糎二粍、横十七糎、厚さ一糎八粍にして縱廿一糎二粍の緣取りある樣なれども左右の限界なし。中央上部に彌陀の梵字その下に花瓶一個、其右に「應永」左に「廿一」と見ゆ。

(五)、長祿三年銘あるもの

縱五十糎六粍、横十五糎二粍、厚さ一糎八粍にして緣取りの跡判然せず中央上部に彌陀の梵字あり、花瓶は見る能はず、右に「長祿」左に「三」とあり。

是等以外の三枚の中、

(六)、縱七十一糎五粍、横、二十糎、厚さ二糎一粍あり、中央上部に彌陀三尊の梵字を刻したるも他に見得るところなし。上半部を少しく缺き、下半部の横幅は二十三糎七粍あり。

(七)、縱三十三糎七粍、横十八糎二粍、厚さ二糎あり、右肩と左下部を缺く。梵字は稍〻崩れて判然せざるも、その下に一對の花瓶を刻す。

(八)、縱四十七糎、横二十二糎五粍、厚さ二糎四粍あり、全面稍赤色を帶び梵字の跡あれども其他は全く判然せざる迄に磨滅せり。

舞鳳狻猊鑑

本年四月トラック工事のため板碑の發見せられたる斜面の向側の傾斜を取くづし中、土工の手によりて古鏡一面發見せられたり(口繪參照)。出土地はたゞちに破壞せられて精査の暇なく、之を明瞭にし難きは遺憾なるも、古墳の存せし證なく恐らくは、農夫により封土既にとりくづされて露出に近き狀態にて存せしものなるべきか。古鏡は、唐宋鏡の模造らしく、此種の文樣のもの三河以東に發見せられること稀れにして日吉臺出土物中の珍物となすべく時代は恐らく平安朝附近に遡り得べきか。徑三寸五厘

宋錢

五月八日本塾豫科敷地地均し工事中第三號先史時代住居址ある台地一角の東南部、第三號住居址の西南に於て發見せられたるもの、祥符通寶、及び政和通寶の二個にして、前者の年號は北宋の眞宗、大中祥符(西暦一〇〇八—一〇一六)にして後者は北宋の徽宗の年號(西暦一一一一—一一一七)なり。

人骨

五月十日　古錢出土地の東方、第三號住居址の東南に於て人骨一體發見さる。土工が崖下の土をとり崩す際上方より落下しきたれるものにして出土形態を明確にせざるは殘念なれどその近傍下方より磧石若干を出だせり。人骨は風化の爲鑑定困難なれども繩紋土器時代のものにあらざることは明かなり。